

# SHOW HEY シネマルーム

## Data

監督：デビッド・フィンチャー  
脚本・映画版原案：エリック・ロス  
映画版原案：ロビン・スウィコード  
原作：F・スコット・フィッツジェラルド

出演：ブラッド・ピット/ケイト・ブランシェット/タラジ・P・ヘンソン/ジュリア・オーモンド/ジェイソン・フレミング/イライアス・コーチーズ/ティルダ・スウィントン/ジャレッド・ハリス

## ベンジャミン・バトン 数奇な人生

2008年・アメリカ映画  
配給/ワーナー・ブラザーズ映画・167分

2009(平成21)年2月7日鑑賞

梅田ピカデリー

## 👁️👁️ みどころ

1918年に老人の姿で生まれたベンジャミンは、年と共に若返っていく。そんなバカな！誰もがそう思うが、アカデミー賞最多13部門にノミネートされた本作は、ストーリー的にも映像的にも魅力がいっぱい！テーマはベンジャミンとデイジーとの愛だが、2人が結ばれるのはいつ？何歳の時？ベンジャミンだけ時計が逆回りなら、結ばれた一瞬から2人は離れていくばかりだが、そんな恐怖に耐えられる？「証拠主義」の私には、パンフレットのストーリー紹介における2人の年代計算が合わない点が気になるが、そんな細かいことは気にせず、大筋で大きな感動を！

## 「証拠主義」の弁護士は、ちとうるさい

私は2002年以降勝手に映画評論家を自称し、弁護士との二足のわらじをはいているが、私の本業はやはり2009年3月末で丸35年となる弁護士稼業。弁護士とは因果な商売で、依頼者の法的悩みを聞き、それを交渉や裁判で法的に解決して報酬をもらう仕事。坊主も因果な商売で、人間が死ぬことによって生計が成り立つのと同じで、弁護士も人間が法的悩みを持つことによって生計が成り立つわけだ。

弁護士として35年間も第一線を走り続けてきた中で、私の身についたのが証拠主義、つまり法的紛争については何事も証拠がなければ主張できないし、勝てないから、あらゆる物事について、その根拠は？その証拠は？と突っ込んでいく習性が身についてしまったわけだ。それに対して映画評論家に必要な資質は、証拠主義とは全く無縁の直感や感性。なぜ、そんな描き方をするの？なぜ、そんな結論になるの？と質問しても映画の世界や映

画評論家の世界では「俺がそう思ったから」あるいは「俺はそれがいいと感じたから」で十分なわけだ。ところが、「証拠主義」の弁護士はちとうるさい・・・。

## パンフレットの説明では、計算が合わないが

そんな弁護士と映画評論家の二足のわらじをはく私が思い悩んだのが、アカデミー賞13部門にノミネートされたこの映画におけるベンジャミンとデイジーの年齢計算。この映画のポイントは時計が逆回転していくこと。つまりこの映画は、しわくちゃな老人顔で1918年に生まれ、先行きは短いと思われていたベンジャミン（ブラッド・ピット）が以降年々若返っていくというありえぬ一想定にもとづく人間ドラマ。ベンジャミンが出会う運命の女性がデイジー（ケイト・ブランシェット）だが、こちらはイヤでも年々年をとっていく普通の女性。そんな2人の出会いと別れ、その中で2人が体験する一瞬のめくるめく愛の姿、そしてベンジャミンの死亡による永遠の別れ、この映画はそんなすばらしい展開を見せていく。しかし、「証拠主義」が身についた私の計算でどうしても合わないのが、ベンジャミンとデイジーの年齢なのだ。

私が購入したパンフレットのストーリーの欄にはハッキリと、1918年に、ベンジャミンは「80歳の肉体で生まれてきた」と書いてある。しかし、ナレーションではベンジャミンは「80代で生まれた」と語られていたはず。またメモを取りながら私が観た映画の中では、ベンジャミンが死亡したのは2003年の春。そうだとすると、ベンジャミンは「85歳の肉体」で生まれてこなければ計算が合わないはずだ。

またパンフレットには、ベンジャミンがデイジーにはじめて会ったのは1930年で、デイジーが6歳の時と書かれている。それは映画でも一致している。つまり、デイジーは1924年生まれ。したがって、2003年に赤ん坊姿で死亡するベンジャミンを抱いていたデイジーは79歳ということになる。

次に、パンフレットには「1962年、出逢いの喜びと別れの悲しみ、愛と孤独を知った人生のちょうど真ん中で、遂にほぼ同じ年齢を迎えた2人は結ばれる」と書かれているが、これはどう考えてもおかしい。つまり、1918年にベンジャミンが80歳で生まれたとして、計算すれば1962年にはベンジャミンは44歳（44年目）他方1930年に6歳だったデイジーは38歳になっているはず。しかし、ナレーションで語られるのは、1962年に2人が再会したことと、ベンジャミンが49年目、デイジーが43年目の6つ違いではじめて結ばれること。すると、2人が結ばれたのは1962年ではなく、1967年になるはずだ。それなら、1970年に2人の間に生まれた子供キャロラインが2歳になったという話も辻褃が合うわけだ。

あら探しをするつもりは毛頭ないが、なぜパンフレットのストーリー紹介で「80歳の肉体で生まれてきた」「1962年、2人は結ばれる」などと明らかなまちがいを書くの？

## 結ばれたのは、49歳と43歳の時

この映画最大のポイントは当然2人が結ばれる物語だが、それが訪れるのはベンジャミンが49歳(49年目)でデイジーが43歳(43年目)の時とナレーションされる。1930年にデイジーが6歳だったら、デイジーが43歳になるのは1967年。他方、1918年に生まれたベンジャミンが49年目を迎えるのは1967年だから計算はピッタリ。そんな計算より大切なのは、2人の男女が結ばれ妊娠まで判明すれば、普通その後は2人が共に年老いていくわけだが、ベンジャミンとデイジーの場合は逆だということ。つまり、デイジーは次第におばあさんになっていくのに対し、ベンジャミンの肉体は次第に若返り、最後には赤ちゃんになってしまうのだから、2人の接点(幸せ)はホンの一瞬ということになってしまう。それがわかっているだけに、ベンジャミンの悩みは、そんな自分がホントに父親になれるのかということ。デイジーは無事女の子キャロラインを出産し、ダンス教室を開きながら一家団欒(?)の幸せを味わっていたが、そんな中ベンジャミンの悩みは深まるばかり。さあ、そこでベンジャミンが下した決断と行動とは？

## 肉体は老人、精神は赤ちゃん役をどうやって？

この映画のポイントは感動的なストーリー構成だが、それとは別に映像技術の妙が大きなポイント。だって、85歳の肉体というしわくちゃの赤ん坊を、いかにして映像化？さらに、予告編に登場していた、年齢を聞かれた車イスに乗った小柄な老人が「7歳」と答えるシーンを、どうやって自然に演出？

ベンジャミンの父親はトーマス・バトン(ジェイソン・フレミング)、ベンジャミンの出生と引換えのように妻は死亡してしまったが、生まれてきた赤ん坊のあまりの恐ろしい姿に絶望したトーマスが、赤ん坊をノーラン・ハウスという老人ホームの中に置き去りにしたところから、本格的な物語がスタートする。老人顔だから老人ホームに置き去りにしたわけではなく、たまたまそうだったただけだろうが、置き去りにされた場所が老人ホームだったことと子供に恵まれない黒人女性クイニー(タラジ・P・ヘンソン)が拾ってくれたことがベンジャミンにとって幸いしたことはまちがいない。クイニーがこの赤ん坊を妹の子供だと説明して引き取り、自分が養母となったわけだが、老人ホームなればこそ精神は赤ん坊でも外見が85歳の老人ベンジャミンが順応できたことはまちがいない。

そして、ベンジャミンが7歳になった時に起きたのが、教会の中での奇跡。何とそれまで車イスでしか動けなかったベンジャミンが、牧師の掛け声に合わせて立ち上がり、歩き始めたのだ。そんなチョー難しい演技を特殊メイクをしたブラッド・ピットが熟演！

## マイク船長が大きな役割を？

ベンジャミンが歩けるようになってから数年が経った。ベンジャミンの老人顔は少しず

つ若返っていくと共に、精神的にも少年期から青年期を迎えていく中、下半身も元気になってきたらしい。17歳になったベンジャミンを乗組員として雇ったのはマイク船長（ジャレッド・ハリス）。もっとも、外見はまだまだ老人顔だから、その年齢で「女を知らない」と言うベンジャミンをかわいそうに思い、マイク船長がベンジャミンを売春宿に連れて行ってやったのは大正解。

この初体験によって、ベンジャミンの人生観が大きく変わったのは当然。つまり、金を稼げばこんな楽しいことができるということがわかり、生きる希望が湧いてきたわけだ。そんな「人生の師」ともいえるマイク船長は、1941年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃の後大きく路線を変更するとともに、ベンジャミンに対して大きな影響を与え続けるから、その生きざまに注目！

## ベンジャミンが体験しためくるめく体験とは？

この映画の進行役をつとめるのは、病気のため今は死を待つばかりとなっている老いたデイジーと、デイジーの頼みを受けてベンジャミンの日記を読んでやる娘キャロライン（ジュリア・オーモンド）の会話。その日記には、売春宿での体験を含めかなりきわどいことがしっかり記されているようだ。その1つが、マイク船長の船に乗って世界各地を航海し、ロシアの港町に滞在した時に会った女性エリザベス（ティルダ・スウィントン）とのめくるめく体験。

エリザベスは外交官（？）の人妻だが、スパイ容疑もあるらしい。そんな危険な香りのする人妻と、ベンジャミンが夜毎ロビーで話をするようになったのはなぜ？また、夫の目を盗んで2人が結ばれ、恋に落ちたのはなぜ？さらに、エリザベスがある日突然ベンジャミンの前から姿を消したのはなぜ？そんなミステリーじみた（？）めくるめく体験がスクリーン上で描かれるから観客は大いに楽しみだが、他の女との情事を記したそんな日記を読み聞かせて、デイジーは平気なの？

## 今さら父親と名乗られても・・・

ベンジャミンの父親トーマスは代々ボタン職人だったが、大恐慌時代を無事乗り切り、今は大きな会社の経営者になっていた。1918年に生まれたわが子をノーラン・ハウスに置き去りにしたトーマスは、その後不自由な身体ながら外を歩くようになったベンジャミンを誘って酒場に連れて行ってやったりしたが、どうしても父親だと言い出せなかったのは仕方ない。

しかし、老いの陰が忍び寄ってくる中、先が短いと知ったトーマスは、ある日重大な決意を。つまり、ベンジャミンと一緒に飲んだトーマスはその足でベンジャミンを会社に連れていき、ベンジャミンは自分が捨てた息子であると告白し、すべての財産をベンジャミンに譲りたいと申し出たわけだ。しかし、今さら私が父親だと名乗られても、ベンジャミ

ンは困惑するばかり。さて、ベンジャミンはそんなトーマスの申し出を受けるの？それとも拒絶するの？そして、トーマスの最後は？

## ベンジャミンとデージーは行き違いばかり

前述のように、ベンジャミンとデージーがはじめて結ばれたのはベンジャミンが49歳（49年目）、デージーが43歳の時の1967年だが、それまでのベンジャミンとデージーは行き違いばかり。まず最初にベンジャミンがデージーを見たのは、ノーラン・ハウスの入居者のフラー夫人を孫娘であるデージーが訪ねてきた時。この時6歳のデージーに対して、ベンジャミンは自分の肉体と精神の秘密を打ち明けたわけだが、それをデージーが気味悪がったりせず、率直に受け入れることができたのはなぜ？この最初の出会いの面白さを十分味わってもらいたいが、予想に反してその後の2人は行き違いばかり。

美しい娘に成長したデージーをベンジャミンが見たのは、1945年に太平洋戦争が終わり、ノーラン・ハウスに戻ってきた時。この時ベンジャミンはすぐにデージーだとわかったが、デージーが一瞬ベンジャミンを見ても誰かわからなかったのは当然。だって、あの老人だった男が、今こんなに若返って目の前に立っているなんて……。今アラフォーが流行語となり、40歳前後の女性の輝く生き方が注目されているが、やはり女性が一番輝くのは20代後半から30代半ばまで。したがって、青春の真っ只中にあり、モダン・バレエのダンサーとして活躍中のデージーが、自分の魅力を自覚していたのは当然。そんなデージーから誘われたらベンジャミンはすぐそれに乗ってしまいそうなものだが、ベンジャミンが「君はまだ若い」と一線を越えなかったのは一体なぜ？スクリーンを観ながらそれをじっくり考えることが大切だ。

その後も、ニューヨークでの舞台公演中のデージーを突然ベンジャミンが訪ねたり、パリ公演でのリハーサル中に交通事故によって2度と踊れない身体になったデージーをベンジャミンが見舞いに行ったり、といくつかのストーリーが展開されるが、どれもこれも2人の気持が行き違いになるから、観客のイライラは最高潮……。そんな風に焦らすだけ焦らしたうえで、やっと1967年に49歳と43歳の2人が結ばれるから、その一瞬の価値の大きさがわかるというものだ。

## キャロラインの父親は誰？

キャロラインが赤ん坊の時に「僕はこの子の父親になれない」と悩んだベンジャミンは1人で出て行ってしまったから、キャロラインがベンジャミンのことを知らないのは当然。他方、デージーは今死の床にあり、娘のキャロラインが見守っているわけだが、実はキャロラインはベンジャミンと会ったことがあるらしい。

もちろん、キャロラインが赤ん坊の時にベンジャミンは出て行ってしまったうえで、デージーはその後ロバートと結婚したから、キャロラインは自分の父親はロバートだと信じて

いたはず。しかし、ベンジャミンの日記をこんな風に読み進めていくと、キャロラインの出生の秘密がバレてしまうのでは？ そうか、デイジーは死の直前にそれを明らかにするため、あえてキャロラインにベンジャミンの日記を読ませているの？ しかしそれは、キャロラインにとって、かなりショッキングな事実の提示になるはずだが・・・。

## 筆まめは見習わなくちゃ

ベンジャミンはクイニーによってノーラン・ハウスに入っている老人たちの仲間の1人となったわけだが、85歳の肉体で生まれてきたベンジャミンの寿命はごくわずかと考えられていた。ところが、予想に反してベンジャミンは次第に若返っていったから、クイニーたちはビックリ。しかし、他の老人たちはみんな年を重ねていくわけだから、1人また1人とお迎えがやって来たのは当然。そんな避けようのない現実、デイジーの祖母のフラワー夫人にも訪れたし、ベンジャミンにピアノを教えてくれた老婦人にも。そして、「わしは雷に7回撃たれた」といつも回想している面白い老人も、1人また1人と・・・。

しかし、ベンジャミンがこれらの老人に囲まれて育ったことはラッキー。だって、ピアノを教えてくれた老婦人の「人は皆、愛する人を失うものよ。失ってはじめて大切さがわかるの」との言葉をはじめ、人生の先達たちの言葉はベンジャミンにとって貴重な教訓となったわけだ。それは、ベンジャミンに人生とは何かを教えてくれたマイク船長や、めくるめく恋を教えてくれたエリザベスも同じだが、ベンジャミンがそれを確実に吸収していたのは立派なもの。

この映画はベンジャミンが書いた日記と、マイク船長が生存中はマイク船長と共に訪れた世界の各地から、そしてデイジーとキャロラインを残して1人旅立った後は、一人旅の各地からデイジーに対して送ってきた葉書によって成り立っている。つまり、ベンジャミンはそれほど筆まめな男ということだ。私も相当な筆まめだが、私は1カ所に固定したところで書いているのに対し、ベンジャミンは世界各地を旅しながら書いているところが偉い。私が思うに、ベンジャミンがこんなに筆まめな男に成長したのは、きっと若い時(?)にノーラン・ハウスの老人たちの教えをいろいろと受けたため。ベンジャミンの肉体が次第に少年になり、子供になり、赤ちゃんになっていく姿や、それとともに痴呆症状が現れ何もわからなくなっていく姿は哀しいが、それはベンジャミンが受け止めなければならない現実。そんなベンジャミンにとって、デイジーに対して葉書を書くことは自己表現の最も大切な手段だったはずだ。ノーラン・ハウスに別れを告げ、外の世界に旅立つ時のデイジーに対する「葉書を書くよ」の約束を生涯貫いたベンジャミンは立派なものだ。皆さんも、彼のそんな筆まめさはしっかり見習わなくちゃ。

2009(平成21)年2月12日記